

SSKP

プリンシプル

相模原ダルクニュースレター 第35号(2023年3月)



創設者を偲んで

一般社団法人相模原ダルク 代表理事 田中秀泰

新春の候、皆様におかれましてはお変わりなくご健勝のこととお喜び申し上げます。平素は格別のご厚情を賜り、厚く御礼申し上げます。お陰様で相模原ダルクの利用者、スタッフ共に変わらず全員健康で元気にそれぞれのプログラムに励んでおります。

先日、ダルク創設者である近藤恒夫氏のお別れ会が東京の教会で慎ましく行われ、日本全国の様々な業種、仲間の方々と出席させて頂きました。ここまで多種多様な人間関係の方々に愛され、支えられながら、故人はダルクという団体を全国規模になるまでに成長させてくれたのだと痛感しました。そしてダルクがあったから自分も生きてこれた、ダルクのお陰だと発言された生前の映像を見て、胸が熱くなりました。開設当時の40年前は現在では考えられないほどの差別や偏見があった事でしょう。その逆境に立ち向かい、仲間の居場所を作り続けた故人の信念、行動力の源は、自分自身の居場所づくりだったのでしょうか。私自身も原点に立ち返り、自分自身の居場所や回復の為にダルクを活用できるよう、手綱を緩めてゆっくり気楽な気持ちで故人を送り出したような気がしております。

施設長 金田龍介

立春を過ぎ、本格的な春の訪れが待たれる頃となりました。皆様におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。相模原ダルクでは、新型コロナウイルスの落ち着いたきに合わせて、外部でのイベントも増え少しづつではありますが日常を取り戻しています。

先日、田中代表の計らいで近藤恒夫さんのお別れ会に出席させて頂きました。私自身は近藤さんにお会いしたのは数回しかなく、雲の上のような存在の方でした。お会いできた機会でも緊張のあまりお話しすることができませんでしたが、一緒に空間にいただけで不思議なオーラに包まれ、言葉には言い表せない安心感を抱いたことを覚えています。私を含め多くの仲間が近藤さんという大きな安心感のもと回復の旅路を歩めたことに改めて感謝申し上げます。近藤さんの生前のお言葉で「ダルクは間違いを正すところではなく、間違いに寄り添うところ」というお話を聞いたことがあります。そのお話を聞く以前の私は他人の間違いを探し、指摘し、たしなめ、いかにして自分が優位に立てるか全神経をそこに集中していたように思います。現在でも謙虚さや感謝の気持ちが薄れると、自分の中に居座る昔からの生きづらさに取りつかれ翻弄されることもあります。そんな時こそ初心に帰り、この言葉思い出したいと思います。

『相模原ダルク退職挨拶、並びに回顧録』

高澤 利行（トシ）

私は 3 月末日を持ちまして相模原ダルクを退職することになりました。相模原ダルクも今年の 10 月 1 日で開設 10 年を迎えます。私はその年の 10 月 15 日に相模原ダルクに入所いたしました。早いものであれから 10 年です。

仕事も家庭も何の問題もなく順風満帆で平和に過ごしていた私ですが、50 歳半ばから突然競馬に狂いました。競馬資金欲しさに嘘と騙しを繰り返して、家族に内緒で多額のお金を浪費し、家庭を顧みず、家庭崩壊に導きました。この間、何度も家族会議を開き何枚も誓約書を書き約束しましたが、隠れ競馬は止まらず離婚届に押印せざるを得ない状況になりました。それでも競馬は止まらず元妻にお金を無心し続けたため、訴えられ恐喝未遂で逮捕され留置されました。平林弁護士から「あなたはギャンブル依存症という病気だから、元妻と子供たちの意向で治療のためダルクという施設に行くことを条件として、起訴を取り下げて貰える」との話を伺い、仕方なく相模原ダルクの説明を聞くことになりました。「不起訴処分で保釈になるのなら」との思いで、とにかく不安でいっぱいでしたが相模原ダルクに入所する覚悟を決めました。拘留期限切れの釈放当日は、朝から待ち遠しくて、今か今かと首を長くして待ち望んでいました。22 日間の留置場生活は本当にきつく辛い経験でした。

平成 25 年当時、初期施設の相模湖・千木良寮には代表を含めて 5 名いて、私が最初の入所者でした。その時の私は「変な所に来たな、この人達何なの」ととにかく不安だらけ。また家族に対して「何でこんな所に入れたのだ」との怒り、憎しみ、恨み。とにかく早くダルクを出ることしか考えていませんでした。大部屋で二段ベッドの生活、薬物やアルコールの人達との共同生活、全て初体験の現実から逃避したかった。「自分は皆と違う。病気ではない、依存症者ではない、こんなプログラムが何になる」としか思っていなかったし、なかなか「無力、お任せ」にはなれなかった。

数ヶ月後には入所者も増えて来て、部屋長から寮長になり、買い出し、送迎等々の仕事を任されるようになり、仲間中心の忙しい生活が始まりました。無意識のうちに仲間の中になるようになり、必然的に仲間の大切さ、また、仲間から自分の回復に向けてのパワーを貰っていることを、感じる事が出来るようになりました。この頃からプログラムや、自助グループの大切さが分かるようになり、少しずつ理解できるようになりました。

平成 26 年 10 月「トシ 1 年のバースデー」を迎えることが出来ました。バースデーには平林弁護士も駆けつけてくださり本当に感謝しています。この年 12 月にマネージャーになり責任重大だと実感するとともに、これからも頑張ろうと、活力がみなぎって来ました。またこの頃から家族に対しての考えが変わってきました。入所当初の怒り恨みがなくなって、感謝となり、本心から『ダルクに繋げてくれてありがとう』と思えるようになりました。その後、寮も各地に出来て、私も愛川寮に移動をして寮長を務めましたが、半年後に個室寮で暮らすようになりました。仕事では、精神科病院への面会及び相談、各市町の生活福祉課との相談及び生保手続き、刑務所への面会や手紙のやり取り、弁護士依頼の相談や面会、裁判の立会い、入所者の送迎、小中学校高校等の学校講演、家族相談や当事者相談、エイサー演舞、仲間の相談、家族会の業務、各種の治療プログラム参加（相模原市精神保健センター FLOW、北里大学病院 KIPP、多摩総合精神保健センター TAMARPP）、神奈川県立精神医療センター PSW 講座等、色々と経験出来ました。

平成 27 年 5 月第 1 回、相模原ダルク家族会が開催され、発足当初は参加者も 10 名位でした。今では毎月 30 名前後の参加者で会場もいっぱいです。多くのご家族のみなさんとお会いし、当事者スタッフとして個別相談でも微力ですが関わらせていただきましたことを感謝いたします。

70 歳を過ぎてから身体に体調不良の自覚症状が出て来て、様子を見てきましたが限界を感じて、72 歳の今月末で退社することになりました。最後に私の念願だったハイパーパワーが起きたこととお伝えします。1 年半程前に 10 年近く音信不通だった家族との再会を果たしました。平林弁護士の取り計らいで、元妻から電話がありました。コロナ禍で私の身体を案じてとの内容でした。電話口で泣きながら心配してくれている様子が痛いほど切なかったです。と同時に本当に嬉しかったです。今では元妻、子供たち、孫たちと時々食事会をしたり孫たちの習い事のイベントに招待されたりと、家族の再構築に向かって努めています。埋め合わせも始めました。これも、『今日一日』とステップを使って無心で過ごしてきたからだと思っています。私に関わってくださった田中代表、平林弁護士、多くの仲間、多くの皆様、長い間ご支援くださいましてありがとうございます。感謝して筆をおきます。

『気づいた者勝ち』

ズイ

アルコール依存症、ズイと申します。山形で生まれ育ち、良い家族に恵まれ、幼少期、学生時代を過ごしていました。ただ、物心ついた時から、毎晩ビールを飲んでいました。地元のしきたりで、商売人の長男に与えられた事です。飲み会に参加する事も時々有りました。

ハウスメーカーに就職し、働き始めてからは、大好きな仕事も順調に進んでいました。酒の方も少しずつ量は増えてましたが、耐性もつき、うまくコントロール出来ていました。とにかく仕事は大好きでした。そのうち、酒量も増え、休日前は1日数十リットル飲んだり、早飲み大会で2連覇したり、『ビールの化け物』の称号がついていました。その頃から、大怪我をしたり、ブラックアウトが多くなりました。酔いつぶれない為、周りから心配されなかったのも依存症の発見に繋がらなかった理由かと思われます。

ブラックアウトからの飲酒運転により二十数年働いた会社を辞め、次の関連会社で働いていた時は、まだコントロール出来ていたのかな、と思えます。色んな仕事をしながら、雇用保険などの収入で細々と飲んでいましたが、姉が自分の異変に気づき、精神科の診察を行い、アルコール専門病院への入院が決まりました。

山形での1回目の入院時、お酒をやめなければならい、と気づいたが、飲酒欲求に耐え切れず、断酒をやめ節酒でいこうと、間違った答えに辿り着き、転落の生活となりました。収入が少なくなり、自宅売却後、実家まで手放す羽目になり、家族も離散し、自分は東京で大手マンション会社に入社し現場監督をやりましたが、依存症のため3ヶ月と持たず連続飲酒でどうしようもなくなり、国立市役所の福祉課に助けを求め、2回目の入院の運びとなりました。その後、相模原ダルクに入所することに決めました。

入所した時には、自分が正しいと思っていて、周りを受け入れない時期が長く続きました。しかし、仲間との共同生活を続ける事でクリーンになった頭で、少しずつ気づける様になりました。気付く事は、自分の行動を正しい方向へ導いてくれる。2回目の入院時、再度お酒をやめなければと思えた時。1人ではやめられないと思った時。施設に入って、施設を出たら飲んでしまうと思った時。このまま続ければ何とかなると思えた時。再飲酒したらとんでもない事になる（もしかしたら死んじゃうかも）と思った時。やめ続けるには自分を変えなければと思えた時。第4・5ステップの後、お酒中心に自分は生きてきたと思えた時。自分の事だけでなく周りの人たちに配慮できるようになったと思えた時。他の人の回復が自分の回復を支えていると思えた時。等々、仲間との会話、ミーティング、自助グループ、診察、色んな情報の中に、いたる所にヒントが有る。

自分の足りない事に気づき、直す方法を考え、違った時は別の方法を考え、良い方法を考えついたら、やり続ける。出来なかった時、自分が嫌な思いをする。そして、少しずつ出来ない事の割合を減らしていく。今、依存症に対して出来る事は、「気づいて、考えて、行動する」の繰り返しだと思っています。自分の心が楽になる様に、今まで出来なかった事を出来る様になり、自分を少しずつ良い方に導き続ける事が必要だと思います。

自分は典型的なアルコール依存症者です。飲酒歴50年、実家を売却した放蕩息子です。今の自分が有るのは、自分を変えてこられた環境があったからです。相模原ダルクに入所して、仲間との関わりを通じての気づき、寮長、職員としての気づき、今まで順調に回復出来た事に感謝しています。

スマートフォンを持てた事、自動車運転免許証を持てた事、家族に会いに山形へ帰った事など色々ありましたが、中でも家族との再構築は今まで一番幸せに思いました。自分の病気に対して最善を尽くしてくれた事。

私は、仲間と共に相模原ダルクで過ごすことにより、今の回復途中の自分を信じられる様になりました。これからも、気づき、考え、行動し続けます。

仲間、相模原ダルク、病院、すべてに感謝します。

『僕の人生、まだ途中』

リョウスケ

依存症のリョウスケです。クリーンタイムは一年半を過ぎました。施設に繋がった当初はこんなに時間を過ごすとは思っていませんでした。僕は10代の頃に薬物を使い始めるのですが、夜遊びばかりしていてクラブにばかり通う音楽好きの人間でした。薬物と遊ぶ金欲しさに人のお金に目を付けて、身近にいる人達に嘘をついたり、騙す事をしてお金を手に入れては薬物を買って、薬物を使う事を最優先していました。使い方も脅迫的で、あればあるだけ使い、後先何も考えていませんでした。出来るだけ多く手に入れて、効果を味わう事がやめられませんでした。それを続けていくと隠し事も多くするようになり、家で引きこもる事も増え、孤立していきました。借金も作り、問題となり、何度か家族に肩代わりしてもらう事もありました。プログラムに繋がるまでに3回どん底を着くのですが、底を着く度狂ってしまい、実家の自分の部屋で妄想が出ていて、今までした悪事の罪悪感に押し潰されたり、自傷行為をしました。家族にまで暴力を振るってしまいました。部屋の壁中にマジックペン等で文字を書いたり、布団に包まりじっとしていたり、しばらく日数が経つと状態が少し落ち着き、また使い始める事になり、また妄想が出て引きこもるの繰り返しで、使う薬物の種類も増えてまた狂ってしまい、妄想状態で精神病院への入院を経験しました。それからまた使い始めてしまい、狂ってしまうのは薬物が原因だと思わず、なぜ狂うのかを考えたりはしませんでした。退院から半年後に数種類の薬物を使い、また狂って、焦ったり怯えたり、カーテンを開け窓の外を確認したり、落ち着きがなくなり、ついには警察に捕まる、警察が来ると思った朝、本当に刑事さん達が逮捕状を持ち家に来ました。めちゃくちゃになった部屋で写真を撮られ、署に連行されました。留置所の面会室で家族に施設行きを言い渡され、裁判後21歳の時に施設へ入寮しました。僕の悪い癖と病気はすぐに脱走やスリッパに繋がりました。スリッパした事は長年に渡り正直にはなれず、精神状態を崩した時に打ち明けました。依存症である事もずっと認められず、頑固に壁を作っていました。脱走や自主退寮は止まらず、出て行って早い時で1日、長くて1年ぐらいで施設へ戻って来させてもらい、十数回繰り返し、もう何度したか覚えきれていません。出る前はいつも今回は今までとは違うと思い、上手く行く事を妄想していましたが、出た先で想像通りとは行かず、上手く行かない事ばかりで途方に暮れたり、スリッパする事もありました。そんな僕を施設の仲間達は毎回受け入れてくれました、感謝しています。僕の飛び出し続けていた要因には、早く施設を出たい自由になりたい焦りや、ルールを破ったり、欲求不満だったり、薬物使用を目論むそういった事を正直に話せなかった事にあるとも思っています。今は苦手な自分の内面的な考えや感情を伝える事、表現する事が出来る様に練習しているところです。仲間達は僕の力となってくれていて、正直であるための助けとなっています。今僕は施設生活で初めて一人暮らしの寮で生活させてもらっています、ずっと大勢の仲間との寝食を共にする生活をしてきましたがそれにはとても大きな意味があったと思います。今は一人の空間で寂しさを感じた時もありましたがそれにも慣れ、限られた自由を満喫出来る様にもなっているところです。そんな中デイケアとNAに通っているところです。車移動だけではなく歩く事も増え、散歩好きな僕にとってはありがたい事です。炊事、掃除、洗濯など全くしなかった繋がる前とは違い、今は食べたい物と栄養面を考え買い物をして調理して食べて後片付けをする事に感謝と楽しみを憶えています。定期的に1Kの部屋を綺麗に掃除をすれば気分も良くなり、晴れた日には溜まった洗濯物を洗って干して取り込んでたたむ事をしています。他にもプログラムに繋がって出来る様になった事は沢山あります。薬物を使い、部屋や人間関係をめちゃくちゃにする生き方とは離れ、一人暮らしの生活を送る事ができている事に嬉しさを感じて感謝しています。あと人生において凄い出来事が入寮中にありました。20歳前後の頃に出ていた沢山の妄想のひとつを信じてとらわれていて、現実離れしていてあまりよくない絶望的な妄想でしたが、2年前のある日に寝床でそのような事はないと思える様になり、頭の中がすっきりしました。僕にとって大きな問題だったのでその出来事はとてもありがたい経験です。この先の希望にもなっています。もう昔の様にどん底を着きたくありません、新しい生き方を続けて行きたいと思います。

新年祈願



新年会



国立市福祉事務所職員研修



国立精神神経医療センター 意見交換会



節分



仙台ダルクフォーラム



1月家族会（田中代表）



2月家族会(千葉ダルク白川代表)



メンバー報告

2月のステージアップ

新規入寮者

イサ Stage1 に仲間入り！

メンバー

ワタ Stage4 に UP！

イケチャン Stage2 に UP！

ブーチャン Stage2 に UP！

スタッフ

施設報告 2月1日現在 利用者47名です。

Manager 1名		Chief 4名		Trainee 3名		Support 5名
Stage1 1名	Stage2 9名	Stage3 16名	Stage4 5名	Stage5 2名	通所者 1名	

活動報告・予定

12月報告

2日 個別支援計画会議
 2日・9日・16日・23日
 相模原市精神保健福祉センター内
 依存症回復プログラム（FLOW）
 9日代表参加
 3日 駒木野病院意見交換会
 5日・26日 横浜保護観察所
 薬物再乱用防止プログラム
 7日・14日・21日・28日
 北里大学病院治療プログラム（KIPP）
 8日 相模原市立上溝中学校薬物乱用防止講演
 10日 駒木野病院メッセージ
 8日・15日 八街少年院薬物依存離脱指導
 12日 HRI 水澤都加佐先生カウンセリング
 14日 寮長会議
 15日 温泉プログラム
 16日 定例会議
 17日 相模原ダルク家族会
 19日 HRI 水澤都加佐先生セミナー
 20日 相模原ダルク忘年会
 21日 12ステッププログラム・田中代表
 22日 神奈川県立寒川高等学校薬物乱用防止講演
 23日 相模原ダルククリスマス会
 26日 デイケア大掃除
 27日 多摩総合精神保健福祉センター内
 薬物再乱用防止プログラム
 ナイトハウス大掃除
 28日 EC 会議
 29日 プログラムカンファレンス

1月報告

3日 新年顔合わせ
 ニュースレター34号発送
 4日 書初め
 5日 ビンゴ大会
 6日 個別支援計画会議
 4日・11日・18日・25日
 北里大学病院治療プログラム（KIPP）
 6日・13日・20日・27日
 相模原市精神保健福祉センター内
 依存症回復プログラム（FLOW）
 13日高澤参加
 10日 横浜保護観察所
 薬物再乱用防止プログラム
 14日 駒木野病院メッセージ
 16日 HRI 水澤都加佐先生カウンセリング
 令和4年度 国立市福祉事務所職員研修
 17日 寮長会議
 19日 相模原ダルク新年会
 21日 相模原ダルク家族会
 23日 HRI 水澤都加佐先生セミナー
 24日 多摩総合精神保健福祉センター内
 薬物再乱用防止プログラム
 25日 12ステッププログラム・外部講師
 26日 横浜保護観察所
 薬物再乱用防止プログラム
 28日 依存症に関わる援助職のための
 グループ・スーパービジョン
 29日 仙台ダルクフォーラム
 30日 定例会議
 31日 EC 会議

相模原ダルク家族会のお知らせ

家族の回復は本人の回復と重なります。そのため毎月行っています。相模原ダルクスタッフ及び、外部から講師プレゼンターを招いてお話を聞かいたします。相模原ダルク入寮者内外のご家族が集まり、勉強と交流の会（ミーティング）を開いています。依存症者の家族の方ならどなたでも参加できます。他の家族会の方も歓迎です。毎回 20 名程度が参加しています。ご希望により、施設スタッフとの面談もできます。

毎月第 3 土曜 午後 1 時半～午後 5 時 予約不要 直接会場（相模原ダルクデイケア 2 階）へお越しください。

＊会費として 1 家族 2 千円をいただき通信費や講師謝礼に使わせていただきます。

<2022 年 12 月家族会報告>

12 月 17 日（土）1 時半～5 時 26 名参加（21 家族） 初参加 4 名（3 家族）

講師：朝倉崇文先生（北里大学医学部 精神科医師 KIPP 担当）

「アディクションってなに？～「やり過ぎる」をどう扱うべきか？～」パワーポイント使用 印刷資料あり

「アディクションになる人の特徴」について。これは埼玉県立精神医療センターの成瀬先生の研究ですが、「1、自分に自信がない。2、人を信じられない。3、本音を言えない。4、見捨てられる不安が強い。5、孤独でさみしい。6、自分を大切にできない。」これはとても分かりやすく暖かい言葉ですね。当院での心理検査の結果でも似たようなことがあります。まず「ミスへの囚われが強い。」完璧主義の傾向があり恥の意識が強い。「見栄が強くて負けず嫌い。」そのため「本音が言えなくて嘘をついてしまう。」その結果、孤独で寂しい。そこで「正直に話す練習が必要。」特定多数の人に受け入れられる場が必要ということになります。

これに関して「ネズミの楽園、ラットパーク」という研究がありまして、依存症について真をついた研究として注目されました。ネズミを孤立した環境に入れたのを植民地ネズミと称します。一方チップをたくさん入れた気持ちいい環境に入れたのを楽園ネズミとします。楽園には仲間もたくさんいて遊べるようになっていて社会的な好ましい環境に置くのです。モルヒネ水とふつうの水を両方に置いておき、どちらがモルヒネに依存するかという実験です。すると辛い環境にある植民地ネズミの方がたくさんモルヒネを飲みます。要は劣悪な環境で孤独していると、薬物摂取が増えてしまうという実験です。その後、植民地ネズミを楽園ネズミに混ぜるという実験をしました。すると楽園にまぜられた元植民地ネズミは、いつのまにかモルヒネを使わなくなっていくという結果が得られました。このことから、ネズミも孤立しているよりも、社会的に受け入れられて集団の中に居る物の方が、依存に陥らないというのが実験が示す所ではないかと考えられます。実は集団療法などでも、治療プログラムそのものよりも、誰かに受け入れられる、失敗した人がたくさんいる事に気づいて、孤独を忘れられるものであれば、効果があるとわかってきました。こういうことを一番やっているのが自助グループであり、ダルクのような回復施設なのです。

「家族へのアドバイス」ですが、起きている問題を整理する、これは一人で考えすぎず、誰かに相談する事です。また自分自身も疲弊していることを意識して自分自身をケアしましょう。誰かのためにとすると非常に力がでますが、そこにばかり集中して結果相手を追い詰めてしまったりするものです。自分の問題は自分が解決する、それはアディクトもそうです、ご家族もそうです。最終的な目標は自分の幸せです。自分を大切に人のための人生にしない事は、とても大切です。人の問題は人の問題として、自分の問題は自分の問題として切り分けて、そういう生き方を背中で見せるというのも大事なかなと思います。情報を集めることも大切ですが、治療者になる必要はありません。最後に、これがとても難しいのですが、アディクト本人の課題と、自分の課題を分ける。自分の生活を最優先にすることが大事だと思います。

文責：伊藤

※公式ホームページ内、最近の記録欄に詳しい報告をお載せしております、ぜひご覧ください。

＜献金御礼＞

比留間陽子様 楯弘様 梅澤紘一郎様 大野悦司様
大和・綾瀬保護司会様 神奈川県立寒川高等学校様 匿名様

＜献品御礼＞

宮田桂子様 上山雅子様 音吉様 水澤都加佐様 大和・綾瀬保護司会様 四反田勉様
山名三枝子様 都筑宗子様 高平恵様 守屋美樹様 針木伸佳様 小谷田郁代様
久保夕子様 清水静江様 大野悦司様 鈴木優子様 上原裕子様 荒川美紀様
三浦紀子様 梅澤紘一郎様 仲井和義様 林妃登美様 箱守恵美香様 匿名様

＜献金・献品のお願い＞

皆さま方には暖かいご支援をいただき、誠に感謝しております。重ねてのお願いで心苦しいのですが、大所帯となり食品・日用品が常に不足気味です。お米、缶詰、調味料、石鹸、シャンプー、洗剤、等々、ご家庭で余ったもの、献品いただけると助かります。ご家族には再三のお願いをしましりました。改めてニュースレター読者の皆様へ、献金・献品のお願いを申し上げます。

＜振込先のご案内＞

◎郵便振替払込口座 口座名「相模原ダルク」口座番号 00270-1-138788

※発送作業の簡略化の為、大変恐縮ですが郵便振替用紙は2号に1度のペースで全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解ください。特に必要のある方、『匿名希望』の方は、その旨を通信欄に、その都度書き下さるようお願い致します。

プログラムディレクター水澤都加佐先生より：『依存症からの回復とは…』アルコールなどの物資の摂取やギャンブルなど気分を変える行動への身体的、精神的依存を克服して、生きるためにこのような薬物摂取や依存行動の必要性や欲求を感じることなく、バランスが取れた生き方を身につけるプロセスのこと。回復の過程で、その人の身体的、精神的な状態・有様が変わり、もはや幸福感や充実感を得るために、アルコールや薬物、ギャンブルが不必要になる。

要するに、回復とは、日々の積み重ねをしていくプロセスそのものが回復、と考えられます。依存症は慢性疾患であり、常に自己管理に努め、再発を防ぐ努力が欠かせません。したがって、依存症から回復は Recovering であり、Recovered ではない、ということです。

編集後記：3月は変化の時。今回はアルコール、薬物、ギャンブルの体験談が揃いましたが、特に第一号入所者である高澤さんが回顧録を書いてくれました。それぞれに、回復とは、孤独とは、家族とは、考えさせられます。紙幅の都合で割愛しましたが、プログラムに関してとして、ポールさんの貢献も大きかったのですが、コロナ禍の後、今は水澤先生が継いで下さっていることを申し添えておきます。（サービス管理責任者 伊藤いずみ）

プリンシプル

相模原ダルクニュースレター NO. 35

編集人：一般社団法人 相模原ダルク

〒252-0237 神奈川県相模原市中央区千代田 3-3-20

TEL042-707-0391 FAX042-707-0392

URL <https://s-darc.com> Email info@s-darc.com

発行人：特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷 3-1-17-102

定価 100 円

